

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

吉野の人の告げたるにまかせて、百川相伴^{ともな}ひ、まづ多武の峰に登り、それより吉野の道にかかる。A 五日なるべし。雨のなごりの梢^{こずえ}しめやかに、日はのどかに差して、細き花の木どもは若葉のみ赤くさし広がりたるに、花の顔いと白く咲き交じりたるあり。高きはまた雪のかかりたるやうに立ち並びて、五里ばかりのこなたなれど、1 余の山にはまさりてかかる色ある、ましてやと思ひて、雲なんかかる山ぞ吉野なりといふほど、田鶴ならば朝なん飛び越えて行くべし。下市といふに川ありて渡る。日のやや傾きたるに、なほ暖かに照りて風少しも吹かず。春の水の緑なるがいと浅く、舟うち渡るほどは道も細けれど、例の山桜はただ並木植ゑたるばかりに乱れで、畑は菜の花の黄金敷きたらん浄土のやうに、麦の青く伸びたるも交じりて、陽炎^{かげろう}うち煙りたるが、ここかしこ藁^{わら}もて葺きたる家にするならん、真柴くゆらせて、前なる山水の流れには、蕪洗^{かぶろ}ふも見ゆ。それさへ花の木陰を立ち去らねば、

居て見たい日向の家や山桜

行くほどに千本といふなるよし、山ひとつ花なればここぞ吉野ならん。またあなたに見れば、山の桜三里ばかり立ち並びたりといふ。

2 山桜一里数へておきにけり

百川も句はあるべし。かくて蔵王堂に登りて、鳥居のもととなるなにがしのもとに宿る。

この日あまりにのどかなりしが、日暮れたれば山おろし荒く吹きて、雨の降り出でたる、俄かに寒うさへなりつ。雪や降るべしと思ふに、主もさはいふなり。さあれ、かかる空の荒れには花いたく散るめりや、いかにせんと、我が作り置けるものを思ふばかりに、寝も寝ず。

B

夜の間にいたく降り積もりたる雪の、いと白う高うて家さへ埋もれたる、あきれて眺めも入れず。さすがにのどけかりし花の梢どもは、吹き折れたるなどして雪のかかりたれば、ただあはれなる吉野の曙ならん。

鶯の凍えて明ける桜かな

千本の方を見れば、万花ただ一時に吹き落ちて冬の木立のごとく、それが中にひともの松の青かりしかば、「あの松なん、昨夜は見ざりし」といふに、主の「あれこそ吉野の隠れ松とは申せ。花の時は見えざればなり」といふに、百川がいへる、「雪にぞ松は隠るべきを、3 花の盛りは雪よりもまた深ければ」といふ。

我いへるは、「さるは、散りてぞ松の頭はれたる、ここにその盛りを思ふべし」とぞ。主曰く、「この山の御神は、吝しむき御心のおはします。また、吉野の盛り見んこと難しとやらん、歌詠む人はものに書きて残したまへりとかや申せ。げにさなり。この御山の盛りといふは、所の人も知らず、やうやく気色立ちて、4花咲くべしやと待ちまうけたる人にもことづけして、今日や明日なんといふに、一夜のうちにも思ひがけず盛り立ちて、昨夜見5たまひたる花のごとく、こは咲けるかと思へば、俄かに嵐して、かかるさびしき山の心地にはなんなれ。この御神の御心は、深く惜しませたまうて、人には長く見せ6たまはじとしたまふなり」と。雪はなほ止まず、午の刻ばかりまでも降りつつ、晴れたるに、をちこちもただ白妙なれば、「吉野の里に降れる白雪」と詠める歌の心にはかなひ7はべらん。これは花見んとてさすがに遠く来たれる人の、何を思ひ出に留まりて、花の蔭かげに明かさんともおぼえず。日の色少し雲より漏れて、梢の雪のしめりてぞ落つる。山の鳥どもはただ我がものに花をぞ領じたるが、俄かにおどろきて立ちて飛び帰り鳴くも、なほのどかならぬ眺めなるべし。

(建部綾足「紀行 かたらひ山」による)

(注) 多武の峰：奈良県桜井市にある山。藤原鎌足をまつる談山神社がある。

蔵王堂：吉野にある修験道の寺院、金峰山寺の本堂。

「吉野の里に降れる白雪」：『古今和歌集』に載る坂上是則の歌。上句は「朝ぼらけ有明の月と見るまでに」。

問一 空欄 A に入る旧暦の月の異名としてもつとも適当なものを次の中から選び、マークせよ。

イ さつき ロ しはす ハ みなつき ニ むつき ホ やよひ

問二 傍線部 1・3・4 の意味としてもっとも適当なものを、それぞれ次の中から選び、マークせよ。

1 イ 日本中の山の中にこのような美しい色彩は見たことがない

ロ 脇の山にもこうして雪が積もったような景色が広がっている

ハ 他の山にはこのようにすぐれて見事な花の色があるはずもない

ニ あたりの山々までもあのように真つ白な雲がかかっていることだ

3 イ 桜が満開の時は、花が雪の積もった時より深く周囲を埋めるので

ロ 花が一斉に咲き出すと、雪よりも人の目を引き付けるものなので

ハ 桜花が盛んに咲く様子は、雪が深く積もった時分より玄妙なので

ニ 花盛りの折の趣は、雪の情趣よりもずっと味わい深いものなので

4 イ 花が咲くはずもないと予測していた人にも風聞がつたわって

ロ 花が咲くにちがいないと待ち構えていた人にもたよりして

ハ 花が早く咲かないものと期待した人も様子を察知して

ニ 花が咲くのかしらと首をかしげていた人に噂が届いて

問三 傍線部 2 「山桜一里数へておきにけり」の句の大意としてもっとも適当なものを次の中から選び、マークせよ。

イ 吉野の山里では桜が何よりの慰めだから、皆が起きるとすぐ開花の数を数えるのだ。

ロ 名高い山桜を初めて見たので、とりあえず一里ほどの距離を歩みながら堪能した。

ハ 山桜の本数を一里の間は数えて進んだが、あまりにも多いのでやめてしまった。

ニ 山桜の総数を知りたく思い、一里に何本あるかを数えて類推することにした。

ホ 古人は一里ごとの数を計算した上で、山桜を計画的に植林していったのだ。

問四 空欄 B に入る句としてもっとも適当なものを次の中から選び、マークせよ。

イ なほ散らで雲も味方や山桜

ロ 花を見に遠くも来たり吉野山

ハ 花知らぬ衆生ありてや斧の音

ニ 手を当てて嵐聞く夜や吉野山

ホ 春もまだたき木の色や山桜

問五 傍線部 5・6・7 の敬語表現は、それぞれ誰に敬意をはらっていると考えられるか。もっとも適当なものを次の中から選び、マークせよ。

イ 筆者 ロ 主 ハ 御神 ニ 歌詠む人 ホ 読者

問六 一時期吉野に住み、花と月とをこよなく愛したことで知られる平安末期の歌人であつて、『新古今和歌集』にもっとも多く之和歌が採られた人物は誰か。次の中から選び、マークせよ。

イ 後醍醐天皇 ロ 西行 ハ 正徹 ニ 本居宣長 ホ 源実朝

問七 次の中から本文に書かれている内容と合致するものを一つ選び、マークせよ。

イ 筆者は、門弟の百川を伴つて多武の峰や吉野など大和の名所を経巡る連歌の宗匠であつた。

ロ 吉野へいたる途次、道を見失つた筆者は、夢のように美しい農村を目にして心を和ませた。

ハ 筆者一行は、吉野の知人宅で歓待を受けた夜、雪のように散り積もる桜花に陶然となつた。

ニ 時ならぬ嵐によつて隠れ松を見ることができた筆者は、吉野の花の圧倒的な有様を思つた。

ホ 神意により雪は一向に降りやむことがなかったので、筆者は雪を花に見立てて心を慰めた。

【通釈】吉野出身の人が私に告げた通りに任せて、百川を伴い、まず多武の峰に登り、それから吉野の道に差し掛かる。時は三月五日である。雨の名残のある梢はしんみりとして、日はのどかに射して、細い花のついた枝などは若葉ばかりが赤く広がっている中に、花がとても白く咲き混じっているものがある。桜の木の梢の高いものはまた雪がかかっているように立ち並んで、五里ほどの手前ではあるけれども、日本中の山の中にこのような美しい色彩は見たことがない、まして近くで見たらすばらしいだろうと思つて、雲がかかっている山は吉野山であるというあたりを、鶴ならば朝に飛び越えていくのだろう。下市という所に川があつて、その川を渡る。日がやや傾いているが、なお日は暖かく照つて風は少しも吹かない。春の川の水が緑であるがとても浅く、船が渡るあたりは道も細いけれども、例の山桜はただもう並木を植えているほどに咲き乱れるのでもなく、畑は菜の花が黄金を敷いているような極楽浄土のように美しく、麦が青く伸びているのも混じつて、陽炎がぼんやりとしているが、あちこちの藁を葺いている家では食事の支度をしているのだろう、たきぎの煙を立ちのぼらせて、前にある山あいを流れる川の流れには、蕪を洗う者も見える。それまでも花の木陰を立ち去らないので、

居て見たい……私もこの日の当たる藁葺きの家に住み、山桜を見たいものである。

行く間に桜が千本あるということで、山が一つの花のようであるので、ここそが吉野であろう。またあちらを見ると、山の桜が三里ほど立ち並んでいるという。

山桜……山桜の本数を一里の間は数えて進んだが、あまりにも多いのでやめてしまった。

百川も発句はあるだろう。こうして蔵王堂に登つて、鳥居のもとにあるだれそれとかいう人のもとに泊まる。

この日はあまりにもどかであつたが、日が暮れたところ山から吹きおろす激しい風が荒く吹いて、雨が降り出したことで、急に寒くもなつた。雪が降るだろうかと思つていると、家の主人もそのように言うようだ。そうではあるが、このような荒天では花がひどく散るだろうか、どうしようかと、自分が作つておいたものを思うように、心配で眠れない。

手を当てて……耳に手を当てて、不安な気持ちで激しく吹く風の音を聞きながら過ぐす夜であることよ、この吉野山で。

夜の間にひどく降り積もつた雪が、とても白く高くて、家までも埋もれているのは、呆然として景色も目に入らない。そうはいっても穏やかであつた花の梢などは、吹き折れているなどして雪がかかっているので、ただも

う悲しい吉野の夜明け方であろう。

鶯の……鶯が凍えて夜が明けるような寒い朝に眺める桜であることよ。

千本の桜の方を見ると、全ての花がただわずかの間に吹き落ちて冬の木立のようで、その中に一本の松が青々としていたので、私が「あの松は、昨夜は見なかったが」と言うと、主人が「あれをこそ吉野の隠れ松と申します。花の咲いている時は見えないので、そのように申すのです」と言うので、百川が言うには、「雪に松は隠れるはずだが、桜が満開の時は、花が雪の積もった時より深く周囲を埋めるので」と言う。

私が言ったことは、「それなのに、桜の花は散って松があらわれた、ここにその桜の花の盛りを思うことができよう」ということである。主人が言うには、「この山の御神は、けちなお心でいらつしやいます。また、吉野の花の盛りを見るようなことが難しいというのでしょうか、それを歌を詠む人はものに書いてお残しになられたとか申します。たしかにその通りです。この御山の花の盛りというのは、土地の人も知らず、次第に花が咲きそうになって、花が咲くにちがいないと待ち構えていた人にもたよりして、今日か明日には咲くだろうと言ううちに、一夜のうちに思いがけず花は盛りになって、昨夜あなたがご覧になった花のように、これは咲いたかと思うと、急に嵐になって、このように寒々とした山の様子になるようです。この御神の御心は、深く物惜しみなさつて、人には桜の花を長く見せないようになさろうとするのです」ということである。雪はやはり降り止まず、正午ぐらいまでも降り続け、その後晴れたが、あちこちがただもう真っ白であるので、「吉野の里に降った白雪」と詠んだ歌の趣には適いましょう。これは花を見ようと思つてやはり遠くから来た人が、何を思い出に残して、花の木の下で夜を明かそうとするとも思われない。日の光が少し雲から漏れて、梢の雪がとけて落ちる。山の鳥などはただ我が物顔で花を独り占めしているが、急に驚いて飛び立って鳴いて帰るのも、やはり穏やかでない眺めなのだろう。

【解答】【問一】ホ

【問二】1Ⅱイ

3Ⅱイ

4Ⅱロ

【問三】ハ

【問四】ニ

【問五】5Ⅱイ

6Ⅱハ

7Ⅱホ

【問六】ロ

【問七】ニ